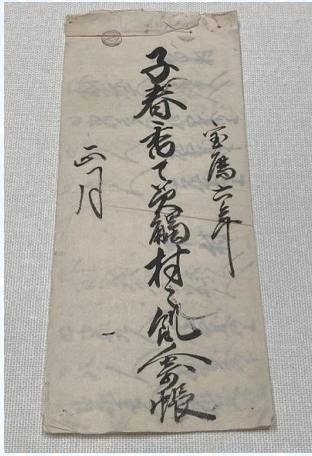


# 飢饉を乗り越える

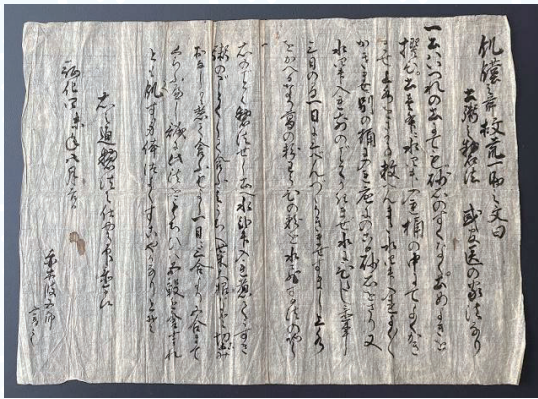
新型コロナウイルスの感染は世界的な規模で拡大し、人々の生活や経済活動に甚大なダメージを与えています。しかし、私たちの先祖は、長い歴史の中で自然災害や飢饉、伝染病など多くの災難を乗り越えてきました。今回は江戸時代の飢饉についてお話しします。

「飢饉」とは、作物が実らず食物が不足して飢えに苦しむ状態のこと

とで、江戸時代は冷害や旱害（日照り）・水害、火山の噴火など異常気象が多く、東北地方を中心に凶作が相次ぎました。さらに度重なる臨時増税（加免）は人々の生活を圧迫し、そのため江戸時代中期以降の農村の



「子春香々美触村々飢人寄帳」  
(中島家文書)



「土粥之製法」(赤木家文書)

生産力は低下し、年貢を納められない農民は田畑を放棄して出奔したり（絶人）、食べるものがなく飢人になる者が増えました。江戸時代の飢饉といえば、享保・天明・天保の飢饉が「江戸三大飢饉」としてよく知られていますが、これ以外でも疲弊する農村では、小さな災害でも飢饉となることがありました。

香々美触の大庄屋・中島家が宝暦六年（一七五六）年に津山藩に提出

した「子春香々美触村々飢人寄帳」によれば、この年の飢饉により、中島家が管轄する和田、香々美中、藤屋、土居、瀬戸、小座、下森原、入の各村から三五四人の飢人が出ています。飢人には津山藩から米（御救米）などが支給されますが、宝暦期は各村からたびたび御救米の嘆願書が提出されています。

江戸時代後期の天保の大飢饉は、美作国内でも具体的な数は不明ですが、多くの餓死者を出しました。上齋原村では天保四年（一八三三）の総戸数一三三戸が、同九年には九二戸と、わずか五年の間に大幅に減少しています。減少した戸数のすべてが餓死したわけではないと思いますが、村明細書には「近年打ち続く凶年に付、木地挽のもの共死仕り、…」とあり、木工を生業として食糧生産に主力を置かない木地師の人々を中心に多数の餓死者が出たことが想像できます。

こうした状況の中、人々は色々な知恵を巡らせました。弘化四年（一八四七）に書かれた「土粥之製法」という史料は、飢饉の際、飢えをしのぐために土でお粥を作るマニュアルです。「ある医者の子の家法で

ある」と書かれています。ここでは、

砂や石の少ない土一升と水四升を桶に入れ、よくかき混ぜて水を捨て、土中のゴミや砂・小石を取り除く作業を一日三回、三日間繰り返して、出来上がった土に水を二升入れて煮てお粥のようにして食べる。また、葉大根（アブラナ）などの野菜を入れても良い。これを一日三合から五合まで食べれば、穀物を食べなくても飢えることなく、身体も強く健やかになる。

と書かれています。果たして土粥が実際に食べられたのかどうかはわかりませんが、書かれてあるような「身体も強く健やかになる」栄養価はないでしょう。しかし、このように度重なる災害の中、私達の先祖は生きるためにあらゆる努力をして乗り越えてきたことがうかがえます。

終わりの見えない新型コロナウイルス騒動ですが、私達も先人が乗り越えてきたように、一日も早い終息に向けて頑張ってください。

参考：『鏡野町史』『上齋原村史』『鏡野町総合調査報告書』『中島家文書』『赤木家文書』

鏡野町教育委員会 生涯学習課 日下  
電話(0868)54-7733